

2023年1月31日

2022年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

がんと認知症を併存する高齢者の疼痛有症者割合と疼痛への対応の実際
：システマティックレビュー

Prevalence of Pain and Pain Management
in Older Adults with Cancer and Comorbid Dementia
：A Systematic Review

21MN033

氏名 藤本 遼

要旨

【目的】

本研究の目的は、がんと認知症を併存する高齢者(以下:がん・認知症併存高齢者)を対象としてシステマティックレビューにより疼痛有症者割合、および疼痛管理内容を明らかにすることである。

【研究方法】

PRISMAに従いレビューを行った。検索に用いたデータベースは、PubMed、CINAHL Plus with Full Text、Embase、CENTRAL、PsycInfo、医中誌とした。キーワードは「Dementia」「cancer」「pain」「pain management」とし、介入研究、および観察研究を収集した。スクリーニングは2回行い、2人ペアで独立して行った。一次スクリーニングではタイトル・抄録からスクリーニングし、二次スクリーニングでは全文を精読し採択の最終決定を行った。研究の質の評価はRoBANSツールを使用した。

【結果】

1. 検索結果: データベースから8,167文献が検索され、9文献を採択した。
2. 文献特性: 論文の刊行国はアメリカ4件、日本3件、台湾1件、イタリア1件であった。研究デザインは、横断研究3件、後ろ向きチャートレビュー4件、後ろ向きコホート研究1件、多施設観察研究1件で、すべて観察研究であった。対象施設はナースিংホーム5件、病院2件、自宅2件であった。認知症重症度は、中等度と重度が9割であった。がんの種類は肺、大腸、肝臓、前立腺、乳房、口腔、血液と多様であった。
3. バイアスリスク評価: 参加者の選定、および暴露の測定は全部「低」であり、その他は「低」または「不明」であった。
4. がん・認知症併存高齢者の疼痛有症者割合: 22%-61.6%であった。認知症重症度が軽度群67.9%、中等度群55.9%、重度群41.8%と、重度群になるほど疼痛有症者割合は低かった。また、がんのステージⅠ・Ⅱ群では16%、Ⅲ・Ⅳ群26%と、がんの進行群で疼痛有症者割合は高かった。
5. 疼痛の評価と管理の方法: 本人の自己申告による評価、医療者の観察に基づく評価、投薬が必要となった疼痛をカウントした研究に分けられた。がんのみの高齢者と比較して、がん・認知症併存高齢者の方がオピオイド処方割合、および投与量が低かった。また、認知症重症度が高いほど有意に処方割合が低かった(軽度群71.4%、中等度群76.2%、重度群35.0%) ($p = .016$)。疼痛への非薬物療法の有効性や、認知症高齢者の療養環境調整、コミュニケーション方法の工夫等について報告した文献は認めなかった。

【結論】

がん・認知症併存高齢者の疼痛有症者割合は、がんのみの高齢者と比べて低く、認知症重症度が高いほど疼痛は過小評価される傾向が示唆された。また、オピオイド処方割合は有意に減少することが示された。今後がん・認知症併存高齢者の疼痛アセスメント方法の確立、および医療従事者への認知症ケア教育を進める必要がある。